

「犬と一緒に元気になるまちつていいですよ。まちに犬があふれているんです」

六本木の事務所でお会いした水谷孝次さん（五十九歳）は、いきなりこんな話から始めた。

ある地方都市から、まちを元気にしてほしいという依頼があったのだそうだ。テーブルの上にパンフレットがあつた。さまざまな表情で横断歩道を渡っている犬たちに目が引きつけられた。ふと手にとりたくなる楽しげのある表紙だ。事務所のあちこちに、針金や紙で作った犬が何匹もいて、愛らしい顔で来訪者をながめている。

目の前にいる水谷さんも、作り物の犬に負けず劣らず、不思議な心地よさを醸し出していた。アニメのキャラクターにいそうな愛嬌のある表情で、出会つて数分しかたつていないにもかかわらず、まわりを自分の世界に引き込んでしまう。

かつては、グラフィックデザイナーとして一世を風靡した男である。日本国内のみならず、国際的な賞をいくつも受賞している。全盛期には、地下鉄の駅を歩いていたら、広告の八割が水谷さんの手がけたものだったこともあったと言う。そんな華やかな経歴をもつ水谷さんが、元気のないまちをどんな風に活性化していくのか、とても興味深い話だ。

彼は、これまでに、阪神大震災の被災者、9・11テロの後のニューヨーク、大地震で大きな被害を受けた中国・四川省やインドネシアなどに、ある切り札を使つてとびつきりの元気を配つてきた。

「ぼくは、戦争や災害といったマイナスを背負つた地域の人たちに元気を与えたたいと思つています。不況に苦しむ地方の人たちにも

未来への希望の灯火



みず たに こう じ
アートディレクター・水谷孝次さん

おはらだやすひさ
取材・文 小原田泰久
ながいひろし
写真 永井 浩

Human Document
ヒューマン・ドキュメント

笑顔は世界を変える

同じです

「そのためには、これが大事なんです」と、水谷さんは一枚のポスターを見させてくれた。そこには、たくさんの人の顔がびっしりと並んでいた。みんなうれしそうに笑っている。日本人もいれば、白人も黒人もいる。国や人種、宗教を超えて笑顔の花が咲いている。

水谷さんの切り札というのは、この「笑顔」だった。訪れた地の住民を巻き込んで、笑顔の輪を作っていく。笑顔が笑顔を生み、笑顔の連鎖が起ころ。それを写真に撮ってポスターにする。不思議なもので、自分が笑い、人の笑顔を見ているうちに、気持ちが明るくなり、元気がみなぎつてくるのだ。その地方都市も、笑顔と大して活性化していくというのが水谷さんの狙いだった。

水谷さんは、この活動を「メリープロジェクト」と名付けた。「メリー・クリスマス」の「メリー」である。ハッピーと似ているけ

る

三歳児らしからぬ決意だ。

「父親が戦争で耳を負傷して片方の聴力を失っていました。根は明るい人だったのに戦争のために人が変わってしまい、怒りっぽくなつて、母ともよくけんかをしていました。そんなときに、ぼくの笑顔が険悪な雰囲気を和ませたこともあります。ぼくは小さいながら笑顔の威力を知ったわけです。そして、父を変えてしまったような戦争などない世の

中にしなければいけないと誓つたのです」

三歳の時点ですでに笑顔は水谷さんの切り札だったのである。笑顔が家庭の雰囲気を変えるように、地域を、そして世界を変えられるのではないか。そんな種が、ここまでまれたのだ。

しかし、その誓いは、しばらく頭の隅つことに追いやられてしまうことになる。大学を卒業してから、一流デザイナーへの道を無我夢中で走つた。上京して、デザイン事務所で働き始めた。先輩たちがごみ箱に捨てた失敗作を家に持ち帰つて勉強したこともあつた。ろくに食事もせず睡眠もとらずに働いて胃に穴が空いたこともあつた。山あり谷あり、必死になつて歩を進めた。その甲斐あつて、デザイナーとして最高の評価を得るようになつた。胸を張つて「大成功！」と言える人生ではないか。



れども、ちょっとニュアンスが違う。苦しくつらい毎日であつても、クリスマスにはそんなこと忘れて楽しく過ごそうよ。だから、メリー・クリスマス！』という乗りが、「メリー」にはある。過去の苦しみにとらわれず、未来への不安に心を煩わせることなく、まずは今この時を笑顔で過ごすことからスタートしようよ、という勇気と前向きの力を感じさせてくれる。今この時の笑顔が、過去を癒し、未来への希望の灯をともすのだ。戦争や災害、不況という暗さの中でこそ、メリーの花はきれいに開く。花火のように、真っ暗な夜空をバックに大輪の花を咲かせるのである。

一流デザイナーになつて見えた風景

一九五一年に名古屋市で生まれた水谷さんは、三歳のときには、心に決めたことがあつた。「ぼくが大人になつたら世の中を変えてや

たものがまつたくないことに愕然とした。心に去来したのは、満足感でも達成感でも幸福感でもなかつた。幸せどころか、まだ足りない、まだ上があるという焦りさえ出てきたのである。まさに、坂の上の雲を追いかけているようなものだつた。

自分は何のためにデザイナーになろうとしたのだろうか。そんな問いかけが自然に出てきた。「世の中を変えてやる」という三歳のときの誓いが頭の隅つこからむくむくと膨らみ始めた。

思つたら飛ぶ。水谷さんのモットーだつた。デザイナーとしての頂点に駆け上がつたのも、やろうと思つたら、世間の目や常識といふ枠にとらわれることなく、躊躇なく行動に移してきたからだつた。

今度も、水谷さんは飛んだ。何十年も苦労して登つた山頂からである。それまでとは意味合いの違う大ジャンプだつた。

笑顔がとてもすてきだつたので、バシャバシヤとシャツターを押しました。その写真のことはずつと忘れていて、仕事の整理をしようとしたアルバムを見たら出てきたんですね。これは、何か重要なメッセージかなと感じました」この写真で写真集を作り、ラフォーレミニュージアム原宿で展覧会を開いた。この写真集の題名が「Merry」。メリープロジェクトの原点だった。そして、それをきっかけに、世界中の笑顔を集めていくことになる。

この十年間で二十六の国と地域を回り、三万人以上の笑顔を写真に撮つた。二〇〇八年の北京オリンピックの開会式で、子どもたちの笑顔がプリントされた傘が会場中に開いたのを覚えている方も多いと思う。世界的な映画監督の張芸謀氏の演出だつたが、あの写真を提供したのが水谷さんだつた。笑顔の傘が開いたときに、会場中の空気が変わつたと感じた方も多いだろう。笑顔につられて笑顔



2008年、北京オリンピック開会式。子どもたちの笑顔が会場を埋めつくした（提供：水谷孝次氏）

が広がる。何だか心がほんわかしてきて気持ちいい。笑顔には、底知れない力がある。「北京のときも、収入はゼロです。飛行機代やデータ作成代なんかは持ち出しです」広告の仕事と違つてメリープロジェクト

たるものがあつたくないことに愕然とした。心に去來したのは、満足感でも達成感でも幸福感でもなかつた。幸せどころか、まだ足りない、まだ上があるという焦りさえ出てきたのである。まさに、坂の上の雲を追いかけているようなものだつた。

自分は何のためにデザイナーになろうとしたのだろうか。そんな問い合わせが自然に出てきた。「世の中を変えてやる」という三歳のときの誓いが頭の隅つこからむくむくと膨らみ始めた。

思つたら飛ぶ。水谷さんのモットーだつた。デザイナーとしての頂点に駆け上がつたのも、やろうと思つたら、世間の目や常識といふ枠にとらわれることなく、躊躇なく行動に移してきたからだつた。

今度も、水谷さんは飛んだ。何十年も苦労して登つた山頂からである。それまでとは意味合いの違う大ジャンプだつた。

北京に咲いた笑顔の花

「メリープロジェクト」を始めたのは、世纪末の不安と新世纪への期待が複雑に入り混じつた一九九九年だつた。

「ロサンゼルスの女の子を撮つた写真が何百枚と出てきました。バスの中で、その子の

「大きな広告の仕事は全部断りました。何十億ものキャンペーンを、自分を失いながらやるよりも、マッチ一個、ハガキ一枚の仕事を、心を込めてやる方がいいと思つたんですね。スタッフも二十人くらいいましたが、全員辞めてもらいました」

真っ逆さまに落ちた。行き先は奈落の底だと覚悟した。その瞬間、地面に足がついた。そして、まわりを見まわしてみると、今までとはまつたく違う世界が、そこには広がつていたのである。

は、大きな収入を産まない。赤字を覚悟する
のは毎回のことだ。しかし、とびつきりの笑
顔がたくさんあり、そこから幸せの輪が広が
っていくのを見ると、あの三歳のときの誓い
が現実化していく実感をもつことができた。

必ず夜は明ける

「メリープロジェクトで世界中を回ってい
て感じるのは、志を持ち続けて、とことんが
んばれば必ず運が舞い込んでくることです。
ぎりぎりのところで助けがやってきます」

ニューヨークでテロがあつた一年後のこと
だ。水谷さんは、ニューヨークの市内を歩き
回った。笑顔を撮りたかたが、沈み込んだ
まちは、そんな雰囲気ではなかつた。どうし
ようかと途方に暮れているときに「人の女の
子に出会つた。「笑顔を撮影させてほしい」
と声をかけた。メリープロジェクトのコンセ

進んだのである。

中国・四川省やインドネシアでは、現在、
復興中の小学校を訪ね、インドネシアでは津
波で親を亡くした子どもたちがいる孤児院を
訪ねた。どんな顔をして「笑顔を撮らせてほ
しい」と言えばいいのか戸惑いながらの訪問
だつた。しかし、コンセプトを話すと、子ど
もたちの方から積極的に笑いかけてくれ
た。

「ぼくが撮つてきた笑顔はぼく自身の笑顔
なのかも知れないと思います。ぼくが笑顔の
大切さを忘れず、笑顔を伝えたいという気持
ちをもつて、笑顔で生きていれば、まわりの
人も同じ笑顔を返してくれます。まさに、相
手は自分を映す鏡なんですね」

ジャストタイミング、ジャストスマイル。

迷うことはない。まず、自分から笑顔を見せ
ればいい。ブツダは、これを「和顔愛語」と
いう教えとして残してくれた。水谷さんの大

好きな言葉だ。

「それに、マイナスが大きければ大きいほど
笑顔は大きいんです」

負の重荷を背負つた場所で生まれる笑顔こ
そ、たくさんの人を勇気づけ、希望を与える。
間違ひなく、笑顔にはマイナスをプラスに変
える力があつた。

「強い光があれば大きく濃い影ができる
すよね。だから逆に、大きく濃い影がある
ということは、強い光があるということです。
つらければつらいほど、苦しければ苦し
ほど、すばらしい光が訪れる前兆です。だか
ら、それまでがんばる。がんばれなければ、
待つてはいるだけでもいい。必ず光が差し込
できます。夜が明けるみたいに」

本誌のグラビアにも、水谷さんの撮つた笑
顔が紹介されている。何かつらいことがあつ
たら、この笑顔を見つめてみてほしい。きっ
と勇気と希望がわき上がりつてくるはずだ。



津波で被害を受けたインドネシア・スマトラ島バタム島にて。
子どもの笑顔を写真におさめる（提供：水谷孝次氏）